Chapter 40 : **マスコットが温もりを取り戻す方法 Part 1**

ブレイズグリルの中には、こんがりと焼かれた肉の香ばしい香りが漂っていた。ピカチュウは「リザードンの炎キッチン」と刺繍された小さなエプロンを着け、帽子をそわそわと直していた。ランチラッシュ真っ只中、そこに現れたのは、二つの大物だった。

消防士のカメックスと、ビジネスマンのフシギバナ。二人はまるで自分の店のように堂々と席につき、カメックスはヘルメットをテーブルに置き、フシギバナはデジタルノートパッドを取り出した。二人は旧友のように笑いながら談笑していた。

その時、グリルが轟音を上げて開き、マスターシェフのリザードンが登場。爪をタオルで拭きながら現れた。

「よぉ、兄弟たち！」  
リザードンは陽気に叫びながらカメックスと拳を合わせ、フシギバナとはしっかりとツルで握手した。  
「まだ命と取引、救ってるか？」

「毎日だぜ」カメックスが歯を見せて笑った。

フシギバナは笑いながら言った。  
「お前のグリル肉のためなら、株式市場が燃えてても来るさ」

その近くで、ピカチュウは辛口の火焼きカニ（イシズマイの遠い親戚？）を二皿持って立っていた。耳がしゅんと下がり、彼はボソッとつぶやいた。

「最悪だ……伝説の幼馴染トリオを給仕しながら、俺は油で頬がギトギト……」

その時、店のドアの上にあるベルが鳴った。

バンギラスが悠然と入ってきた。カジュアルなジャケットを着こなしている。彼の後ろには、新人のドラゴンタイプ社員であるカイリューが、肩にバッグをかけてにこにこしながら続いていた。二人はまるで対等な親友のように話していた。

ピカチュウはバンギラスと目が合い、凍りついた。

「おう、ピカチュウか？」  
バンギラスは気さくに爪の手を上げた。  
「こんなとこで会うとはな。メシはうまいか？」

ピカチュウの表情が固まった。  
「……はい。仕事中です」

カイリューはピカチュウの視線に気づいたが、何も言わずに座った。バンギラスは微笑みながら続けた。

「人生って面白いな。戦場ではライバルだったのに、今は肉屋で飯食ってるだけだもんな」

ピカチュウは無表情のまま見つめていた。彼は思い出していた。かつて自分は看板マスコットだった。皆が愛した俊敏なトリックスター。今は？ リザードンの店で肉を焼いて、あのバンギラスに給仕しているだけ――かつて倒そうとしていた相手に。

「なんであいつが人生勝ってんだよ……」  
ピカチュウは小声でつぶやいた。  
「運だろ。名声、女、豪邸……全部あいつに行った。俺は？ 油まみれと足の痙攣だけ」

ピカチュウは知らなかった。バンギラスのとんでもない成り上がりは、レックウザの呪われたコイントスが始まりだったことを。だがその秘密は、今日のランチスペシャルのように炎の中に封じられていた。

――

ある気だるい午後。ランチラッシュが過ぎ去った「リザードンの炎キッチン」で、ピカチュウはまだススまみれのまま苦い顔で、制服姿のままスマホでポーキーマンを見ていた。

子どもたちが指を差し、母親が息を呑み、フシギバナのモノクルがスープに落ちそうになった。

ちょうどその時、リザードンがキッチンから出てきた。

「……マジかよ、ピカチュウ」

「い、いや！ ポップアップ広告だったんだ！」  
ピカチュウは下手な言い訳をした。

「六回もタップしてただろ」

クビにはならなかったが、給料はコイキングの切り身並みに薄くなった。ピカチュウはしょんぼりと早退し、夕方には川辺をさまよっていた。思考は負のループに入っていた。

「俺って、永遠にネタ要員なのかな……もうミームも滑ってるし……」

その時、水に足を踏み入れ、感電自殺の準備をしていたピカチュウの足元が――

ブオォォッ！

凍った。

氷の川の上に、まるで冷気の神のごとく立つ二体――ラプラスとスイクン。

ラプラスはため息をついた。  
「またか……」

スイクンは穏やかでありながら凛とした声で歩み寄った。  
「迷っているようだな。でも、お前は無価値じゃない。本気を出した時の力、私たちは見ている。ミライドンを救った時のこと、覚えているか？」

ピカチュウはまばたきをした。  
「……あれ、確かに俺だったな……」

スイクンはそっと頭に前脚を乗せた。  
「グレイシアのもとへ行け。彼女は仲間を探している。お前の火花が、彼女の家族に必要だ」

ピカチュウは一瞬ためらった。  
「でもリザードンって……伝説だし、ミシュランスターもガチャコインも肉の王座も持ってるし」

「だったらニャースに譲れ」ラプラスがクスッと笑った。  
「あいつもう、裏方でダジャレ焼いてるし」

ピカチュウはごくりと喉を鳴らし、エプロンを置いて、グレイシアの家族のコテージへと向かった。そこは雪に包まれた楽園で、笑い声と温もりがあふれていた。スパイスのパンチがない優しいサラダもあった。

中へ入ると、リーフィアがお茶を差し出し、サンダースはチルウェーブを流し、ニンフィアは飾りリボンを整え、そして裏庭ではシャワーズがブースターをお姫様抱っこしていた――また。

そして、キッチンから現れたのはグレイシア本人。気品に満ちたその姿に、雪粉が自然と舞っていた。彼女はクールな雪の結晶ロゴが入ったエプロンを手渡した。

「おかえりなさい」

ピカチュウは鼻をすんと鳴らし、耳がぴくっと震えた。  
「……仲間が、できたんだな……」

隅ではブラッキーとエーフィが静かに見守っていた。ブラッキーはお茶を啜りながら言った。  
「言っただろ、こいつは戻ってくるって」

エーフィは微笑んだ。  
「最悪の嵐ほど、空を一番澄ませてくれるのよ」

その時、ピカチュウはもうジョークじゃなかった。  
彼は家族の一員になったのだ。